

Assault Lily MECHANICS

Prologue 02

「理由 -Miyo Futagawa-」

著： 蜜瀬かえで

「おいしいです」

少し遅めの食堂には、食事をとる生徒たちの姿もまばらだった。

目の前で満面の笑みでカレーを言葉通りおいしそうに口へ運んでいる少女に二水は、苦笑まじりに「よかったです」と返しつつ、内心としては、

(……あんまり『よく』は、ないんですけどね?)

別に学食のカレーがおいしくないとか、そういう話じゃないですよ?

むしろ、さすがガーデン。軍事拠点という感じで。ルーもスパイスからオリジナルに調整されているらしくて。学食のおばちゃんのこだわりを感じます。機会があれば他のガーデンのカレーを食べ比べてみるのもいいかもしれませんね。きっとそれぞれの特色があるに違いありません。

などと思いつつ、

「口元、ついてますよ」

手を伸ばし、備え付けの紙ナプキンでふいてやれば、

「ありがとうございます」

そして、

「ふみ、『おねえちゃん』」

少し照れくさそうに、それでいてうれしげな表情で口にした呼び方に。思わず口元がゆるみそうになりながら。

——まったく。

「……ほんとうに厄介な子を拾ってきたわね」

——数時間前。

職員室に呼び出された二水に、担任の吉阪から出てきたのは昨日と同じ言葉だった。

昨日。市街地での戦闘後、二水は託された「お願い」を果たすべく、倒れた少女を連れ、一足先にガーデンへと帰還していた。

事の顛末は事前に伝えておいたため、校門前にはすでに担架が待機しており、気を失ったままの少女は速やかに運ばれていった。

……少し気になったのは、運ばれていった先が、校内の

保健室の方でなかったことだったが。

それより先に。

「おつかれさま」

一緒に待ちかまえていた吉阪は、

「……また厄介な子を拾ってきたものね」

移動車両内で二水が作成した報告書を受け取りつつ、げんなりした顔で今と同じ言葉の口にしたのだった。

ただし、今日のほうがさらにげんなり具合が高いように思えるのは、たぶん気のせいではない。

それはやはり、

「うちが反GEHENNAのガーデンだからでしょうか？」

最後の最後で『千代御代』と名乗った女性は、自分が『GEHENNA』の顧問だと言っていた。

GEHENNA。元々は民間の研究者集団で、最新鋭のCHARM開発など、対ヒュージ研究を先導してきた機関であるが。

投薬や移植手術による『強化リリィ』の研究を始め、倫理や人権を無視した研究も行われていることから反GEHENNAを謳うガーデンも少なくない。この百合ヶ丘もその一つだ。

しかし、

「それもあるけど」

と、吉阪がとんとん、と指先で叩いたのは、二水が提出したレポートに書かれた名前。

「本当に厄介なのは、こっち」

『千代御代』。

「GEHENNAの『魔女』」

『魔女』、ですか？」

「そう。それも『本物の』ね」

元は欧州にあるっている魔術師たちの集落とかの出身らしいんだけど。

私たちみたいに科学技術でオートメーションされたものじゃなくて、本当に自分の身体ひとつで魔法を自在に扱う者たち。

「そういう意味で、正真正銘の『本物』」

それは、確かに。

元々希少な存在だった魔法が認知された後、科学との融合によって利便化した現代においては、確かに、より希少な存在だと言える。

けれど、

「そんなひとがどうして、GEHENNAに？」

確か本人も『魔術顧問』と名乗ってはいたけれど。GE

H E N Aの研究は、どちらかと言うと科学的な側面が強いものだ。

「千代御代には別名があつてね」

二つ名というか、悪名というか。

肩肘をデスクに立てた吉阪が口にした名は、

『空論の魔女』

純粋な魔術分野の出身でありながら、科学分野に傾向して、他の研究者たちからは出てこないような机上の空論だけで結論へと辿り着いてしまう。

曰く、

「千代御代に関われば、どんな完璧な仕事であっても、欠陥だらけの試作に墜ちる」

非の打ち所がなくなつて、火のないところに煙をたたせる。

それが『千代御代』。

『顧問』なんて肩書きだけど、要はG E H E N Aに体よく囲われているだけで。外に出した途端、あの組織自体を壊してしまいかねない……言ってみれば、爆弾みたいな人なのよ」

本人もそれをよく理解してるから、余計にたちが悪いんだけどね……。

吉阪の語る内容は、二水にとってはまったく初耳の話ばかりだったが。

（確かに、そんな人物なら、世に知られていないのも納得です）

しかし。吉阪の口振りから感じるのは、

「先生はお会いしたことあるんですか？」

「……昔、一度だけね」

あ、いまちよつと素が出ましたね。

素というかりりイとして『凶乱の少公女』と呼ばれ、活躍していた頃の吉阪風沙が一瞬垣間見えた気がする。

ということはその頃の話だろうけれど。

ここはあえて踏み込まないことにする。

気になる内容なので、あとでこつそり調べようとは思つたが。そのかわりに、

「ということはやっぱり、すごいひとなんですね。『千代御代』さん」

「まあ、ね」

しぶしぶ納得しかねると言う表情ながら、
「安藤鶴紗さん、あの子の持つてる『リジェネーター』、使った後の反動はあなたも知ってるわよね？」
それはもちろんです。

『リジェネーター』は、鶴紗がGEHENAで受けた投薬や移植手術の結果、強化リリイとして持つことになったブーステッドスキルだ。

常人なら治るまでに数ヶ月かかるような負傷も瞬時に回復することができる。

ただし、その反動で使用後には大量のカロリー摂取が必要になるため、戦闘の後など大量の食事を摂っている鶴紗の姿は、すでに見慣れた光景だ。

「あれは千代御代の仕業よ」

御業と言っても過言じゃないわね。

「??? どういうことです？」

首を傾げた二水に吉阪は、

「単純に考えてみて」と、

「人体が負傷したとして、その傷を塞ぐのに必要な成分って」

なにが一番効率的だと思う？

どこから、と言い変えてもいいわ。

「それって……」

「人間よ」

「っ！」

予想はできたが、あまりに刺激の強い言葉に息がつまる。

「もともとは、そういう研究だったみたい」

よく考えればすぐわかることなんだけど。

カロリーって、体内で回復の促進に使われても、それが実際の血肉にはならないわ。

損傷した肉体は？ 流れ出た血液は？

それらはどうやって補充されるの？

そんなことより、もっと現実味のある補給方法があるじゃない。

「その場にいる人間を食べて自分の血肉にすること」

「そんなのっ！」

「ええ」

思わず声を張り上げてしまった二水に落ち着いて、と吉阪は手で制する。

「許されるはずがないし、許されてはいけないことだわ」でも、GEHENAの中の一部の研究者はそれを実現しようとして、

失敗した。

千代御代の手によって。

「理屈とかは私にもよくわからないけど、彼女の提案した方法なら、普段から摂取している分の栄養素と、『リジェネレーター』を使った後の補給だけで損傷の高速回復が実現

できることが示されたの」

そしてその決定打になったのは、

「その補給が『戦闘中でなく、戦闘後でよい』というところよ」

いくら現実的な方法だからって、戦いの最中の捕食行為なんて時間のロスにしかない。

『実際の戦場に出たことがないお子ちゃまの考えたおままごとね。夏休みの自由研究にもならないわ』

そんなふうに言ったらしい。

「千代御代はね、G E H E N Aの中で一番の反強化リリイ研究者なの」

おそらくは、元が自然回顧の魔術師だからって理由が大きいんでしょうけど。

本人曰く、

『人間は人間のまま、ヒュージと戦うべき』

あと、かわいい女の子捕まえて実験とか、サイアク。

カルバニズムとにかく手を染めちゃう自分たちカッコイイとか思ってるでしょ？ 絶対。

いい？ 女の子っていうの、かわいいーって。

愛でるものなの。

愛すべき対象。

人類の宝。

モルモットじゃないの。わかった？ ゴミくずども。

(前半かつこいいのに、後半がいろいろ台無しにしています……)

……でも、いい人なのも確かそうです。

G E H E N A、と聞いたときには嫌な予感も感じていたが、それは杞憂だったようだ。

「だからまあ、そんなことで敵が多いひとでもあるの。特に、強化リリイの研究してる人たちにとったら目の上のたんこぶ」

恨みも買いまくり。

そのせいか、ここ2年くらい姿をくらませてたみたいなんだけど。

「帰ってきたらしいのよ」

ほんのつい先日。

G E H E N Aに。

「いま、大騒ぎになってるそうよ？ 隠れて進めてた研究とか。ひとつずつ、それこそしらみつぶしにつぶして回ってるらしくて」

だからいまも当然、反感が大きくなってるでしょうから、その身内ともなれば、

「あの子は、うちで保護して正解」

そもそも千代御代に身内がいるなんて話、聞いたことないけどね。

それに、

「確認だけど、千代御代は確かに『私が育てた』って言ったのよね？」

「あ、はい」

……でも、それが？

『私が作った』じゃなくて？』

「あ」

そこでもうやく二水にも事情が見えてきた。

千代御代が『私が育てた最強のリリイ』。

そう言った理由。

つまり、

「あの子、おそらく強化リリイと対照的に、千代御代がーから『育てた』いわば、『超自然派リリイ』よ」

『超自然派リリイ』……！

なんだか、すごくすごそうといえますか、実際、それは昨日、目の前で見ましたし、十分わかってますが。

そんな子がいることが、強化リリイの研究者たちの間に知られたら。

「間違いなく、狙われますね」

『私が育てた最強のリリイ』

わざわざそういう言い回しをしたのだ。

それに続く定型句を考えれば、その存在は強化リリイ研究者たちにとって、挑戦状にも等しいものだ。

「だから、うちで保護することには賛成なんだけど」

「……だけど？」

「編入はムリ」

……それは一体、

「どうしてでしょう？」

あの少女のリリイとしての強さは折り紙付きだ。入学すれば、即戦力は間違いないだろう。

「理由は2つ」

そういつて、吉阪は2本の指を立てる。

「ひとつは、あの子の名前」

「……名前、ですか？」

それが、どうして転入できない理由に？

その疑問に吉阪は、

「あの子の名前も『千代御代』なのよ」

「みーちゃんは、どうして『千代御代』って名前だったんですか？」

『みーちゃん』

最初、「みよさん」って呼んでみたところ、

『みーちゃん』で、いいです。先生もそう呼んでくれてましたから」

ここでいう『先生』というのは、彼女を育てたほうの『千代御代』のことだろう。

なので二水もそう呼ぶことにしたのだけれど。

(まだちょっと慣れませんね)

梨璃ちゃんとかには気軽に「ちゃん」付けしてますけど。

それよりもくだけてて、もつと距離の近い間柄のような呼び方ですし。

それこそ本当の家族みたいな。

でも……。

「？」

小首を傾げる仕草や、整った顔立ち。

この子、ほんとぱっと見じゃ、ぜんぜん中学生に見えま

せんよね。

言ってしまうえばむしろ童顔の自分のほうがぜんぜん年下に見えてしまいかねない。

……ただ。外見は大人びてますが、結構中身は子供ばくて。

さっきも「おかわりしてきます」と3回目のおかわりに行ってきて。

(育ちざかりですねー)

おいしそうにカレーを食べ続ける表情は年相応だ。

それで、

「わたしの名前ですか？」と、最初の話題に戻る。

それはですね。

「わたし、先生に拾われる前の記憶、残ってないんです」

あつけらかんと衝撃の告白だった。

『甲州撤退戦』でしたっけ？

あの最中に森の中をさまよってたらしいんですけど。

先生は「たぶん妖精さんの里にでも迷い込んだんじゃない

い？」って言ってました。

いたずらな妖精さんに、記憶と引き替えに今の目をもらったんだって。

「だから、先生がわたしに名前をくれたんです」

先生と同じ、『千代御代』っていう名前を。

そう、にこやかに言うけれど。

「先生、ゲームとかでキャラクターに名前付けるときは、
いつも自分と同じ名前にするんです」

(……そこそこ重たい話に思えるんですけど)

毎回しまらないの、どうしてなんでしようか？

どこか遠く空の下にいるであろう、『先生』『千代御代』
に、ちよつと文句を言いたくなった二水だった。

「まあ、だから中等部にいきなり編入なんておおっぴらに
できないじゃない？」

……たしかに。こんな時期に中等部に転入ともなると各
ガーデンからの注目も避けられない。

それに『千代御代』なんて名前が公表されようものなら、
強化リリィの研究者たちに見つけてくださいと言ってい
るようなものだ。

「でも安心して。その問題はもう解決済みなの」

「え？ そうなんですか」

問題と言うから、てつきり時間のかかるものだと思うて
いた二水に、

「それについては後で説明するけど、もうひとつがね……」

嘆息し、吉阪は背後に目をやった。

そこには、頭を抱えて突っ伏している一人の上級生。

ブリュンヒルデこと、生徒会三役の一角、校内のレギオ
ンとリリィを率いる総指令官。

出江史房様のお姿がありました。

「……ええと。さつきから気にはなっていたんですが、ど
うしてブリュンヒルデがこんなところに？」

ここは職員室であり、決して彼女のような学院のトップ
が頭を抱える場所ではない。

しかも普段のきりっとした佇まいからは想像できない
ようなどんよりとした雰囲気で、

「……………」

なにかつぶやいているようだったが、おそらくラテン語
で二水には聞き取れない。

『なんで？ どうして？』みたいなことを繰り返してる
だけよ」

今日一日、私もただ例の、うちにいるほうの『千代御

代』と一緒にいたの。

そのときずっとラテン語を使って会話しててね。

うちのほうの『千代御代』曰く。

「魔術書は、ほとんどがラテン語で書いてありますから」
らしくて。

あっちもずいぶんと堪能でね。

それでこっちも喜んじゃって。

こっち、と指さすのは史房様。

ラテン語を好む彼女が挨拶や会話によく使っているのは確かによく見る光景だ。

「それが、どうして……あのように？」

言葉を選びつつ。

ブリュンヒルデほどの人物が頭を抱えるほどのなにがあつたのだろうか？

「ありも、おおありよ」

そう言つて吉阪が二水に指し出してきたのは、

「身体計測と、普通科の学力試験、技能試験に、あとは、模擬戦の結果ですね」

二人はおそらく今日一日かけてあの少女を「試験」していたのだろう。これはその「結果」だ。

その結果用紙をぱらぱらとめくる二水に、

「よく見て」

「……」

(これは……！)

身体計測の結果、普通。

これは昨日も通信で聞いた通りだ。

マジ保有量スカラー数値に関しても、マジの波形に至っても二水のものと同程度。中々よく似た結果だった。

覚醒しているレアスキルも『鷹の目』。

このあたりの情報は事前に報告済みのはずだが。

問題は、その後からだつた。

普通科の学力判定、全科目ほぼ0点。

技能試験（射撃）、命中精度、平均以下。

そして、

「……なんですか？ この最後の模擬戦の結果に書いてある『デコピン一発』って？」

「……書いてある通り」

「……？」

「書いてある通り、デコピン一発で終わらせたのよ、あの子」

最後の「試験」である模擬戦を前にして、吉阪は疲れきっていた。

主に、精神的に。

身体測定の結果は、昨日二水が提出してきた報告書の通りだった。

それは問題ない。

CHARMを扱うことができ、すでにレアスキルにも覚醒いる。スキラー数値もそこまで高くはないが、百合ヶ丘の入試を受けるための基準は十分に満たしている。

しかしだ。

最初は意気揚々と共にいた史房も大分消耗していた。

今では、

「ホク オプス ヒク ラボル エスト……」

「もぎせん、というの、冥界で行うのですか？」

と、その隣を歩く少女、『千代御代』は不思議そうな顔で話しかけているが。

『「これこそ、仕事」ね。言いたくなる気持ちも分からないでもないわ……」

昨夜に開かれた緊急の「会議」中でも、二水から提出された記録映像を見て「是非このガーデンに！」なんて。一番喜んでいたものね。

会ってすぐのいつもの挨拶に、ラテン語で返されて。彼女もラテン語が話せるってわかってさらに興奮していたし。

それが、まず学力テストだった。

結論から言えば……小学生レベル、だった。

仮にも物理学の大家であるあの『千代御代』の下で育ったのであるなら、その方面には特化していてもおかしくないはず。

だったのだが……。

そもそも、

「……すみません。これは何と読むんでしょうか？」

漢字が読めなかった。

そして、

「……ここには、なにを書いたらいいんでしょう？」

ペーパーテストというものを受けたことすらなかった。

というよりも、経験はしたはずだが、それが記憶からすっぽり抜け落ちているのだという……。

仕方なく説明してやれば、「なるほど」と。

口頭で結論を答えられるものの、その過程や計算、数値での解答を問えば……。

「そうなるから、そうなるんです、が……」

「……………」

そもそもペーパーテストを口頭で答えられても点数にはならない。

ちなみに英語も読むことはできるが、技術関連の論文英語しか見たことがないため、普通科のテストに出るような普段使いの口語的なものは知識にないと言う。

ラテン語は、

「魔術書は、大抵、自分語りから始まって、肝心な部分以外ほとんど、絵日記みたいなものですから」

読めるし、話せるのだという。

しかし、史房には悪いが。

今、ラテン語はいらないの！

この時点で、頭痛がしてきた。

次に向かった射撃場でも、

「……やったことないです」

その発言の通り、結果は散々だった。

この時点で大体わかってきていたが。

（この子、完全に実戦教育しか受けてない！）

おそらくというか、昨日の戦闘映像と、この言動から、もはやそうとしか言いようがない。

実際、動く標的ばかりを相手取ってきた者にとっては反対に動かない的のほうが狙いにくいという話も聞いたことがある。あるが！

「……ケーテラ デースント」

あー。もう。確かに。その通り。

この子は貴女の言う『最強のリリイ』なんでしょう、千代先生。

でも。それ以外の分野がすっぱり抜け落ちていたら意味がないですよっ！

しかし、まだ希望はある。

模擬戦だ。

昨日の戦闘映像に報告書の内容を併せれば、デュエルにおいて飛び抜けた実力を持つていることは間違いない。

史房の目にまだかろうじて精気が残っているのもそれに期待してのことだろう。

史房自身、デュエルに関して百合ヶ丘の歴史の中で最優と呼ばれるほどの実力者であり、その彼女が是非にと言ったくらいだ。

デュエルに強い子が少なくなった現状、それに飛び抜け

た人材は百合ヶ丘が欲してやまないものだ。

それさえ証明できれば……！

……唯一気がかりなのは、

「もぎせんって、次は何をするんでしょう？」

非常に不安だった。

模擬戦を行う武道場には2人の人物が待ちかまえていた。

そのひとりとは、

「……なぜ真島さんがここにいるのかしら？」

「やだなく先生。なんかおもしろいことやっていうから」

朝から準備して待ってたんですよ？

ふふん、と誇らしげに胸を張る工務科のアーセナルは武

道場にずらりと設置された計測機器を示して見せた。

……頭痛の種が、増えた。

確かに、今の状況はこの『千代御代』にとってよいとは

言いがたい状況だ。

彼女の希望する百合ヶ丘への入学を叶えるには、この模擬戦でもってその特筆すべき実力を示すほかない。

そのための材料は多いに越したことはないけれど……。

（真島さんを昨夜の会議に呼んだのは、判断が甘かったかもしれないわね……）

真島百由、彼女くらいならば『GEHENAの魔女』の存在も知らないはずもなし。かつ何かしら有益な発言も得られるのであれば……と招集をかけたはみたものだったが。

（完全にももしろがつてるわね……）

スイッチの入った百由は、こちらはこちらで何をしでかすかわからない百合ヶ丘の爆弾と言っても言いような存在だ。

昨夜の会議でも。

「ええ、嘘っ！？ マジで!？」

第3世代機でも、円環の御手の使い手でもない少女がC H A R M 2機を同時に起動したという報告を得るや否や、そう叫んで出ていったきり、戻ってこないと思ったら、会議も終盤になって、

「できます！ できますよ！ あーっ！ なんて思いつかなかつたんだろっ。いや、でもまだ理論上の話で、それ

こそ『空論』なんですけど！」

と、ほぼ朝方になってわざわざ第1世代のCHARM2機を抱えて帰ってきて、議論に疲れてぐったりしていた面々をさらにぐったりさせてくれた。

「……朝からって、あなたまた授業をさぼってたわけね」

「許可はちゃんと取っておりますっ」

びしっと親指立てて許可印の押された申請書を提示してくる。

こういうところ、抜かりがないんだから。

嘆息しつつ、もうひとりに目を向ける。

高等部の2年からこの「試験」のためだけに選抜してきた彼女は、普段は諜報や索敵などで活躍しているフリーランスのリリイだ。

この子なら、こちらの守秘義務を守りつつ、能力においても模擬戦の相手として不足なし。というのは、同じく昨夜の会議に集まった一人、伊東閑の意見であり、吉阪としても納得の人選であった。

彼女の持つレアスキルは『縮地』。

消えるようなスピードで動き回る、いわば瞬間移動のスキルである。

それを相手に『鷹の目』使いの『千代御代』は、どうい

った戦いをみせるのか。

百由がうきうきとしているのもあながち否定はできない。

それとは対照に、

「あの……？」

模擬戦で使用するCHARMを史房とともに選び、戻ってきた千代御代が、おずおずと声をかけてきた。

手に持っているのは、昨日の戦闘でも使用していたアステリオンだ。

ただし模擬戦用のため、側面には大きく『模擬戦用』と記されているが。

「問題でもあった？」

「いえ。そうではないです」

「？」

「……もぎせん、はここで戦うのですか？」

ああ。

「大丈夫よ。見かけは普通の武道場だけど、ちゃんとCHARMを使った戦闘にも耐えられる構造になっているから」

そう答えると、

否、と。

「敵はどこにいるんでしょう？」

「……え？」

「さきほど、もぎせんでは戦闘の技能が試されるって聞きました」

その『敵』です。

「……。敵ってあなた、まさか？」

「あいつらです」

「……………」

おそらく、この子の言う『あいつら』とは、ヒュージのことだ。

……どうやらこの子は、ここに来るまでの説明でヒュージとの実戦をいまこれからここで行うのだと思いこんでいたらしい。

「あのね、千代さん」

そう言っ、吉阪は模擬戦とは、ヒュージを相手にした実戦ではなく、リリイ同士で行う戦闘訓練の一環であることを説明したのだが……。

「ダメです」

「え？」

「女の子に痛いことするのは、ダメです」

それはもしかして、もしかしくても……。

「先生が言っていました」

（千代先生………っ！）

もはや、頭を抱えるとかそういうレベルのお話ではない。根本だ。根底だ。

そのレベルからこの子が受けてきた『教育』は他のリリイたちのものと全くもって「違う」。

それでも、吉阪は言葉を飲み込んだ。

ホク オプス ヒク ラボル エスト。

『これが仕事。これこそ仕事』

先ほどの史房の言葉を思い出す。

（私は教師。そう、教師だ）

「あのね、千代さん」

この模擬戦は、専用のCHARMを使用して行うこと。これには殺傷力はなく、確かに攻撃を受ければ痛みもあるが、それも訓練として必要なことである、と説明するも、

「でも、痛いんですよね？」

これに、何の意味があるんですか？

わたしが戦うのはあいつらです。人じゃないです。

そしてやはり、

「かわいい女の子に痛いはことしちゃいけません」

ぷっ、と。

堪えられないというふうには、傍らにいた百由がふいた。
しかし、

(……冗談を言っている、てわけじゃないわね、これ)

この子は、本気で言っている。

だからこそ、厄介なのだ。

それでも、

(さすがに、こういう言い方だけはしたくなかったのだけ
ど)

「千代さん」

「はい」

「貴女は、この百合ヶ丘に入りたいのよね？」

「はい」

「……はっきり言わせてもらうけれど」

それは、無理よ。

今のままでは。

「これが、最後のチャンスだと思ってちょうだい」

「……」

少女の瞳がまっすぐ自分に向けられている。

それはまるで射抜くような。

こちらの心を覗くような。

それをまっすぐに受け止め。

「……………。わかりました」

熟考の末、少女が応えた。

それに安堵を覚え、ほっと息をつきながら、

「……真島さん」

「先生も大変ですね」

すぐ隣で、ニヤニヤしっぱなしだったこの2年生には、

やはり後で説教のひとつくらい許されてもよいと思う吉
阪だった。

散々待たされたわりに、相手の2年生は冷静に事態を見
守っていた。

(さすが、伊東さんが推薦するだけのことはあるわね)

彼女が手にしているのはグングニル。

百合ヶ丘ではダインスレイフに並んで使用する者の多
い機体だ。

一撃一撃の威力ではダインスレイフに劣るものの、機動
性を重視した戦闘スタイルとの相性はいい。

吉阪にとっても思い入れのあるCHARMだが。

(……さて)

ようやく、準備は整った。

両者が向かい合い、配置につく。

間隔は、およそ5m。

相手の『縮地』には十分な距離だ。

その最初の一撃を、いかに捌くか。

もしくは開始と同時に回避行動をとることも考えられる。

ただしこの決して広いとはいえない武道場の中で逃げ続けることは困難だ。いずれどこかであつからないといけない。

勝負はおそらくそのいずれかの一瞬で決まる。

「そのためのハイスピードカメラも準備万端です」

……手回し、ほんといいわね。

ウインクで親指を立てる百由に半分あきれつつ。

両者の間に史房が立った。

彼女が掲げた手を振り下ろした瞬間が、試合開始の合図だ。

「……」

史房が左右に目線を送り確認し、うなづくと、

「それでは」

——開始。

史房の手が降りきった瞬間。

「痛っ」

しんとした武道場にわずかに響いたその声は、それまで一言も口を開いていなかった相手。

2年生リリイのものだった。

場が、まるで時間が凍ったような沈黙に包まれていた。

それをやぶったのは、

「……これで、よいでしょうか？」

吉阪に向けた千代御代の言葉だった。

それに、

(……ちよっと待って)

状況の整理が追いついていない。

確かに、先ほどの予想通り。決着は一瞬だった。
ただし、それは今のような「決着」の形で決まるような
ものでは決してない。

武道場に鈍い金属音が大きく響く。
放り出されたアステリオンが床に倒れた音だ。

そして目の前には、前に突き出され、相手の額を弾き終
えたままの千代御代の指先。

史房が手を下ろした瞬間、彼女は。

自らのCHARMを放り捨て。

『縮地』で間合いを詰めてきた相手の額に、指打——要
するに。

デコピンを決めて見せたのだ。

その異常さに、その場にいる全員が固まっていた。

「???」

小首を傾げた、千代御代を除いて。

(……え?)

「ええーーーーーっ!」

「二川さん。驚きたいのはわかるけど、ここが職員室であ
ること忘れないで」

注意され、思わず口を覆うも、

「待ってください!」

「……理解が早くて助かるわ」

吉坂の言う「理解」。

それは単に少女、千代御代が『縮地』の速度に対応した
こと、だけではない。

その武道場にいた全員が驚愕した理由。

それは、

「CHARMなしの生身で、相手の障壁を抜いたってこと
ですか!」

しかも拳などの格闘術などでもなく、単なる指打。

つまりはただの一般人のデコピンで!

「そういうことになるわね」

「無理です!」

CHARMにはオートガード機能が備わっており、自身
で張らずとも、マジのシールドで小型ヒュージ「程度の」
熱線攻撃ならば防御してくれる。

しかし。「程度」といっても、その威力は拳銃弾並み。

それを越えて貫通する指打など……。

しかも、だ。

千代御代はアステリオンを起動すらしていなかったという。百由が計測していた結果にも、マジを使用した形跡、魔術的な痕跡も一切認められなかったという。

つまり、

「最初からそのつもりだったって事ね」

二水も自身の指を見つめ、中指を弾いてみるが。

これでそんな芸当できる気がしない。

否、二水に限らず、そんなマンガじみた話、普通の人間にできようはずが……。

「ぐっっ！ でき、たーっっ！」

しかしそれに応える唐突の声があった。

二水もよく知る人物。

ブリュンヒルデの奥の席。

これまでまったく気がつかなかったのが不思議なくらいだが、これまた職員室のデスクでパソコンと向き合っていたのは、

「百由様！？」

普段のにぎわしさから想像もつかないほど静かだったため、ぜんぜん気がつきませんでした！

「あ、二水ちゃん！ いらっしやい」

「真島さん、ここはあなたの工房じゃないのよ？」

あなたたち、職員室だつてことほんと、忘れてないでちようだい……。

そんな吉阪にかまわず。

「できちゃいました！ というか、それができるってあの子もほんと相当ですよ！」

うつひやー。マジでやばいわ『千代御代』。

馬鹿ですよ！

あ、いまの馬鹿は天才に対する誉め言葉としての馬鹿であつて決して暴言とかではなくてですね？

「……真島さん、あなたには『反省文』を書くように言っておいたはずだけど？」

「はい！ できました先生！」

そう言つて、吉阪に突き出し見せる。パソコンには、あきらかに反省文には見えない数値の羅列と何かのシミュレーション映像が映し出されており。

それを見た吉阪は、またひとつ嘆息して。

「……いいわ。帰つてよし」

おそらくだが、吉阪が百由に命じた「反省文」とは名ばかりのものだったのだろう。

本来の目的は、

「それじゃあ、がんばってね、二水ちゃん」

新しいおもちゃをもらった子供のようなうれしそうな笑顔で手を振りながら、百由様はそのまま職員室をすたこらと出ていってしまった。

それを見送る二水の手も反射的に振り返したまま、

(……。がんばって?)

「あ、それと」

職員室のドアが再び開いて、出ていったばかりの百由が顔をのぞかせ、

「困ったことがあったら、いつでもお姉さんに相談してね。いつだって相談にのってあげちゃうんだから」

それじゃっ!

と、今度こそ、百由が去っていくのが廊下を走る足音で分かった。

(いつもながら、風のようなお方ですね……)

嵐というより、自由気ままな風のように。

そんなことをぼけーっと思っている二水を現実と呼び戻すかのように、

「でね。本題はここからなの」

吉阪が切り出す。

(……。あれ?)

このセリフ、なんだかデジャブ、感じますよ?

「二川さん、あなたのおうちって何人家族だったかしら?」

唐突な質問がきた。

それに、疑問を浮かべつつ。

訊かれた通り。

「? 両親と、兄と弟、私も入れて5人です」

「そう」

と、うなづく吉阪。

うんうん。と。

それから、

驚かないで聞いてほしいのだけど。

と前置いた後、吉阪が告げる。

「実はね、6人なの」

「?」

もう一度数え直す

父、母、兄、弟、二水。

……5人、ですよね？

疑問符を浮かべる二水に「はい、これ」と吉阪が差し出してきたのは、

（えーと。なんで、ここにうちの戸籍が……

……？？？？）

それでも、差し出されたものに目をやる。

すると、

「……あの？」

「なに？」

察しはついた。

すぐについた。

頭の回転は悪い方じゃない。

だから、すぐに状況は把握できてしまったのが恨めしいのだけだ。

……念のため訊いてみる。

「……誰ですか？ この『二川三夜』って……」

それに、何を言ってるのという表情で、

「あなたの『妹』さんよ」

「……わたし、弟はいても妹は……」

「あなたの『妹』さんよ」

なんか、結構に結構、強引すぎませんか！？

「ご両親の許可はちゃんと取ってある、らしいわ」

「いま、許可って言いましたよね！」

「空耳よ」

あとさらつと「らしい」ってついてましたよ！？

「訊いたわ。あなたの『妹さん』の中学でのこと……」

そしてまたいきなり、何か語り始めました！

「昔から、出る杭は打たれると言うけれど……」

他の子よりも少し「優秀」だった『二川三夜ちゃん』。学

校でいろいろ嫌がらせを受けていたらしいわね。

それでも「大好きなおねえちゃんと同じ学校に通えるなら」なんて。

けなげな子ね。

だけど、あなたが卒業してこのガーデンに入学した後、その嫌がらせはヒートアップしたの。

おそらく、近くにあなたという家族がいない分だけ、それがやりやすくなったんでしょうね……。

ごめんなさい。こんな話、あなたにはおそらく知らされてなかったことで、きつといまショックでしょうけど。

（それよりも、そんなデタラメなお話がさらさら出てくる
ことがショックです……）

「そして『大好きなおねえちゃん』がいなくなった『三夜ちゃん』も、心の支えがなくなって。とうとう、ね……」
それでも、最後まで。

そう、1年とはいえ、中学を飛び級で卒業するまでがんばったのはすごく偉いと思うわ。

そして、いても立つてもいられなくなって、「大好きなおねえちゃん」のいるこの百合ヶ丘まで押し掛けてしまった。その途中でヒュージに遭ったのは、ほんと不幸としか言いようがないけれど。

そこにちょうど。

ちょうど、あなたが居合わせて、見事に『妹』の窮地を救った。

姉妹の絆ってやつね。

すごいわね。

「という設定になったの」

「……設定って言っちゃってます」

「空耳よ」

さっきも言ったでしょ。

ひとつ目の問題は解決済みだって。

「……雑すぎませんか？」

「名前、似ててよかったわね？」

二水の感想に吉阪は先ほどの戸籍をひらひらさせた。

「あとね。これ、本当に本物」

……えーそれはつまり、そんなことができる人は……たぶんですがきつと、ですけど。

「これ全部、かの『千代御代』先生の筋書き。文句があるなら本人に言って」

言いたくても連絡先、知りません……。

「そして私たち教導官は、その『妹さん』の話を聞いて激しく心を打たれたの。それと同時に彼女に非常に高いリリイとしての素質を見いだしたわ。偶然、たまたま、奇遇にもね」

見渡すと、他の先生方が一斉に頷くのが見えたので、これ絶対示し合わせてますよね？

「……ただ、以前から何度も百合ヶ丘の入試を受けていたあなたと違って、あの子にはリリイになるための知識が『一切ない』」

そこで、と。

「実の『おねえちゃん』である『二川二水』さんに、私たち『全員』から「お願い」します」

あなたには、押し掛けてきてしまった実の『妹』である『二川三夜』さんの教育係になってもらって、

「あの子を、来年の百合ヶ丘の入学試験に合格できるレベルになるまで育て上げることに」

特に、まずなにより、

「……お願いだからあの「子供」に、この世界の常識を、教えてあげて」

……ほんと。お願いだから。

昨日も頼まれた「お願い」でしたが。

今日のはさらに切実な「お願い」ですよ、これ？

……あの子を育てたのって、魔女さんであっても、虎、とかじゃないですよ？

そして、あの……ブリュンヒルデ。

史房様……。

貴女にまで手を合わせられたら、私、絶対に断れないんですよ……。

あと、教導官の、先生方も。

何で全員、私をそんながるような目で見つめてくるんですか……？

ここ、職員室、ですよ？

百合ヶ丘の特色の一つに『シュツツエンゲル』という制度がある。

上級生と下級生が『疑似姉妹』となる契約を結び、上級生は姉、『シュツツゲンゲル』として妹である下級生『シルト』を指導し成長を導いていく。

二水の所属する一柳隊では梨璃と夢結がその関係にあり、日頃からその仲睦まじい姿を側から堪能……もとい見守りつつ、二水自身もいつか……なんてことも思っていたりもしていたわけであるが。

まさか、それより先に『実の妹』ができましたよ？

(……人生、何が起こるか分からないものですね)

遠く空の下。この状況を「了解」したという両親に思いを馳せてみたりもしつつ。

「あの……『おねえちゃん』？」

まだやっぱり、お互い慣れませぬね。

呼ばれる側の二水もだが、そう呼ぼうとする前に、ちょっと頬が赤くなつて、目を伏せがちになるとことも。

「かあいいですねえ」

「え？」

「……え？」

うわつ、いまおもいつき口に出してましたよ、私！

いや、別にやましい感じとか、特になくてですね、こんな大人びた顔立ちの整った美人さんな女の子が私みたいなちんちくりんを『おねえちゃん』なんて、恥ずかしそうに呼んでくれるとか、もうなんかそのギャップだけで、ご褒美と言いますか、ありがとうございますで、それがこれから続いていくつてなつたらですねえ、まあ、それはそれでいいかなあ、と思つちやつたりもするわけでしてね？ 弟はいますが、妹もいいなあなんて時期もやっぱりあつたわけで、それが唐突に叶つたわけで、うれしいかうれしくないかといわれたら、うれしいんですけどね！

「……食べないんですか？」

「え、ああ、そうですね」

食べます。食べますよー。

と、何事もなかったかのように二水も止まっていたスプーンを動かす。

（正直、いま味とかよくわからないです）

食堂のおばちゃんには、大変申し訳ありませんが。

突然できた『実の妹』に、カレー食べてるだけでも様になりますねースプーン動かす仕草一つとってもこう、慎ましやかな感じで。でもさつきみたいに口元につけちゃったりとか。

（なんか、いろいろどうでもよくなっちゃいますねー）

よくないのですが。

まあ、でも。

考えていたことはある。

こうやって向かい合つて話しているだけでも、見えてくることもある。

この子がどういう子なのか。

この先、この子をどうやって導いていくべきなのか。

そのためにもまずは食事です！

ご飯をしっかり食べて体調を管理するのも、リリイとして大切な任務ですからね。

と、

『おねえちゃん』も」

「？」

ふっと微笑んで、

「ほっぺについてます」

そう言われ、紙ナプキンでふきふきされる。

……やっぱり。

そうやってうれしそうな顔されたら、

（かあいいですねー）

目を細めて内心、デレデレになってしまっていることは秘密です。

なにせ、『おねえちゃん』ですからね。

『姉』として！

ここは威厳を示さないで。

ほっぺふかれながらだと、ぜんぜん説得力ないですが…

…

ご飯を食べたら『おねえちゃん』としての初仕事です。

「それじゃあ、行きましようか」

「はい！」

いいお返事です。

でも「どこにいくのか？」くらい訊きましようね？

食事を終えた二水たちが向かう先は、寮とは別の方向だった。

途中、食堂を出る前に送っておいだ連絡に全員から了承の返事が届く。

それに、ほっと息をつく。

（こういうことは、なるべく早くに解決するに限ります）

梨璃ちゃんが「悩む前にまず行動」タイプなら、私は「考えついたらすぐ行動」ですかね？

『週刊リリイ新聞』なんかもそういう感じで始めたものです。

やりたいことがあって、それができる道筋が見えたなら迷わずに駆け出す。

梨璃ちゃんには「好きなことにまっすぐなんだね」なんて言われましたけど。

好きこそものの何とやらです。

単に、こらえ性がないだけともいいますが。

——さて。

やってきたのは、校内にある射撃訓練場だった。

「みーちゃん。聞こえますかー？」

「はい」

遠く、射座に着いた『千代御代』改め、『実の妹』の『二川三夜』から返事が届く。

二水が立っているのはその真正面。

背中が支柱に着くくらいの至近距離。

しかも、

「じゃあ、ここー、狙って撃ってもらってもいいですかー？」

指さすのは、自分の頭頂部すれすれの真上。

そこにはちょうど、的の中央がある。

背が足りなかったので台座に乗ってるのはご愛敬だ。

そして、手には愛用のグングニルを機動状態で抱えている。

要するにこれは、

(ウィリアムテルですね)

目標の頭上にリングを乗せ、それを弓を

で射抜く。

職員室で吉阪に見せてもらった三夜の射撃のスコアは散々なものだった。

それを吉阪は「動くものしか撃ったことがないから」と評価していたが。

(私の考えが正しければたぶん違います)

間違っていた場合は……あまり考えたくない。

でもたぶん。きっと、おそらく。

合ってるはずです。

それが昨日、彼女、三夜の戦闘を目の前で「視た」二水の結論だ。

だから、

ダン！

ほんとに頭上すれすれを通り過ぎた弾に。

(結構、怖いですよ！)

直前まで不思議そうに二水と、自身も手に持ったグングニルを眺め眊めついていた三夜が無造作に腕を伸ばしたかと思った瞬間にトリガーを引いたのは、ちよつとといいますか、めっちゃくちゃ予想外すぎますよ！

確かに「撃ってみて」とは言いましたけど！

昼間の「試験」で自信が揺らいでいるという可能性もあり
ましたが……っ！

ダダダダダダダダダダダン！

グングニルの弾丸が「すべて」二水の頭上すれすれを通
り抜けた。

見上げると、頭上に空いている穴は1つだけ。全弾が的
の中央を確実に捉えていた。

予想はしてましたが……。

（これ、夢結様並ですね……）

ただしこれは条件付きで、の結果だが。
でも、それを賞賛するよりも先に、だ。

「……っ。みーちゃんっ！」

「はいっ」

（ほんと、お返事はいい子ですね！）
でも、

「なんで、いきなりフルオート全弾なんですかーっ！」
きよとんとした顔の『妹』を初めて叱った瞬間でした。

「やっぱり、みーちゃん、的をぜんぜん見てなかったんで
すね」

「????」

不思議そうな顔で二水を助け起こす『妹』に説明する。
ちなみに、さすがに唐突に頭の上をフルオート全弾通過
されたら腰を抜かしてもしょうがないですよ？

「ふぎゅ」

手を引かれた勢いで、三夜の胸に飛び込んでしまいつつ。

（あ、結構ありますね）

ではなく。

ふは。

背丈が10cmくらい違うので、見上げる形になってし
まうのに、なにか少し寂しい気持ちになりつつも、『妹』で
す。この子は『妹』。

「じゃあ、今度はそこからいいので同じように撃ってみ
てください」

指したのは、的から5mほどの距離だ。

「????」

首を傾げながらも言うことはそのままちゃんと聞いて
くれるんですよ。

つまり、そういう『教育』を受けてきたということだ。
ダン。

だから、思い切りがよすぎです！

さっきもそうだが、ためらいというものが一切ない。

入学して最初の訓練で鶴紗も似たような行動をとって
ブリュンヒルデに窘められていたが。

（この子の場合は、単に「言われたことは考える前に実行」
しちゃうタイプです……）

聞き分けがいいと言えそうなのだが。

これも、おいおいですね。

それよりも先に。

見上げた的には、先ほど中央を正確に射抜いた穴の他に、
もうひとつ。

的のすれすれをかすった程度の傷が付いている。

これが今の一発だ。

「わかりましたか？」

「……？」

あー。これはやっぱり、感覚で覚えちゃってる感じですか。
か。

「では、さっきとの違いはなんですか？」

「おねえちゃんです」

「はい」

「おねえちゃんがいませんでした」

「その通りです」

もう少し正確に言うなら、マギを帯びた状態で立っている
二水がない、だ。

それはつまり、

「みーちゃんは普通に目で見てるんじゃないで、マギを捉
えて撃つのが染み着いちゃってるんです」

だからマギを帯びていない単なる的に当てられない。

逆に対象がマギを帯びているのなら、動いてようが止ま
つてようが関係なく撃ち抜くことができる。

確かに、実戦ではそれで十分だ。

敵は人類の敵、ヒュージ。それらもまたマギを体に宿す
存在だ。

ただ、

「みーちゃんは、このガーデンに通いたいんですよね？」

「はい」

でしたら、こういう的を撃っていく練習、していかない
とですね。

なにせ、射撃訓練の授業もあるし、その試験だってある。
順番がひっくり返ってなにかおかしい感じもしますが

……。

授業のたびにこうして二水が的の前に立つわけにもいかないのだ。

まあ、とりあえずは、この最初のスコア表があれば、まずは第一関門クリアです。

射撃場を後にし、次の目的地に向かう道中。

「次は、模擬戦です」

そう告げると、

「……また、痛いのをやるんですか？」

案の定の反応が返ってきた。

ただし、それは想定範囲内だ。

「みーちゃん」

「はい」

「みーちゃんは、模擬戦を何のための訓練だと思いますか？」

「わかりません」

ほんと、ためらいやすいですねー。

ただ、悪いことではないです。

余計な見栄などなく、自分にとって不明なことを「わからない」と素直に口にできるのは、逆に教えやすいし、教え甲斐もある。

下手に知ったかぶりされたり、強引に持論に持って行かれるよりもずっといい。

（まあ、全部が全部「わからない」も、それはそれで困るんですが……）

でもこの子に限っては、それもないだろうと判断し、次の問いを投げかけた。

「では、実際の戦闘と模擬戦との一番の違いは何かわかりますか？」

「………戦う、相手です」

今の間は、どっちかというと言葉を選んでましたね。

答えははつきりしていた。

それは昼間、彼女自身が口にしていたことだ。

「そうです。実戦で戦う相手はヒュージです。そして模擬戦では、同じリリイ同士が戦います」

そこにある大きな違いとは何でしょう？

二水自身、模擬戦の意義など深く考えたことはなかった。

対ヒュージの訓練に、姿形、攻撃パターンも異なるリリイを相手に取る理由。

単にお互いの実力を測り合うということが多い気もするし、観客の集まるような試合もあるくらいだ。

それらを含めて、リリイ同士が戦う理由。

なぜヒュージが相手でないのか。

それは、

「ヒュージは何も教えてくれないからです」

実戦でしか学べないこと得られないことがあるのも確かだ。

ただ、実戦の相手であるヒュージがこちらの戦い方をいちいち指摘し、問題点や改善方法など教えてくれようはずもない。

だが、相手が同じ人間、リリイであれば別だ。

『教え合い』です」

模擬戦は『教え合い』なんです。

それが二水が考え、行き着いた「この子のための」答えだ。

模擬戦は個々の実力を競う場でもありますけど。

『教え合い』なんです。

「互いの出せる業を十分に出し合って闘い、互いに『教え

合って』高め合う」

これは同じリリイ同士でなければできないことです。

観客試合も同じ。自分以外のリリイが戦う姿を観て学びを得る。

けれど、

「みーちゃん」

後出しジャンケンみたいで、心がひりつきつつ、言葉を紡ぐ。

「みーちゃんは、お昼の模擬戦の中で、それができましたか？」

リリイの闘いは、その人がこれまで積み重ねてきたことの結果なんです。

みーちゃんは、それに応えられましたか？

「……………」

本当にこれはずるい訊き方だと思う。

この子には、この子への『教育』がこれまであって、それに反するものを今、自分は正論と共に突きつけた。

それに対する答えなんてひとつしかない。

「……………していません」

「はい」

「……………できませんでした」

そう言って、うつむく顔を見上げ、頷いてやる。

「そうですね」

非を認めさせること。

これも大切な『教育』だ。

相手が上級生であるとか、「試験」だとか、はここでは関係ないです。

相対し、それに本気で向き合わない。

それは、向き合ってくれた相手にとっても失礼なことです。相手の積み重ねてきたことを否定するとても失礼なことです。

お相手の誇りを傷つける行為です。

「それは、いいこと、ですか？」

「……ちがいます」

論している自分でも、わかってはいますが。

私も、なんだか心がひりひりしますね。

だからだろう。

せめてもの償いの想いかもしれない。

自ずと手が三夜の頬に伸びた。

うつむくまなじりをなでるように、親指でさすった。

涙が出ていたわけじゃないけれど。

自然と、そうしてあげたくなったのだ。

(……これはただの自己満足です)

そう思いつつ。

「みーちゃん」

名を呼べば、

「……おねえちゃん」

「はい。おねえちゃんです」

だから、

「いまから一緒に謝りに行きましょうね」

武道場にはすでに3人が集まっていた。

そのひとりに、

「昼間は申し訳ありませんでしたっ」

姿を見るや否や駆け足で向かい、三夜が頭を下げた。

(……あの方でしたか)

二水も知っている人物だった。

ずっとどのレギオンにも所属せず、フリーランスで活躍してされている上級生だ。

三夜の隣に二水も並び、頭を下げて謝罪を述べる。

それに最初は戸惑われていましたが。

さすが上級生です。

「今度は、本気、見せてくれる？」

その挑戦的な言葉に、

「はい！」

三夜がはつきりと返事を返した。

「いやー。二水ちゃんすごいね」

お姉さん、感心しちゃうわ。

言いながら計器をいじっているのは百由だった。

「まさか昼のアレをたった数時間で解決しちゃうなんて」

吉阪先生より、教官官に向いてるんじゃないですか？

その言葉の先にはもちろん、

「先生、時間外の使用許可ありがとうございます」

この武道場と、射撃訓練場の使用許可はどちらも吉阪が手配したものだった。

「私も、自分の生徒に任せた手前があるもの」

その吉阪にさきほどの射撃訓練場でのスコア表と説明を伝えると。

「……なるほどね。そういう理由なら訓練次第でなんとかなる、か……」

そうして顎に手をやりつつ。

「……真島さんは、後で待ってなさい」

おおこわ。

などと言いながら、てきばきと測定用の機器の設定を完了していく百由様は。

ブレないですねー。

自身が何かやらかしたときには怖がっているのに、こういうガヤにいるときだと吉阪相手にも結構強気だ。

ちなみに見届け人は多い方がいいだろうと、先ほど連絡入れたときに真っ先に来た返事が、

「えっ！？アレ、またやるの！待っててすぐ行く！」
でしたからねー。

あと、職員室で聞いてたのより、計器の数、増えてません？

あー、と。

多分ですけど。

二水は同じ隊に所属しているアーセナルの子を思い浮かべた。

(ご苦労様です。ミリアムちゃん)

今回、ブリュンヒルデ、史房はこの場にいない。

その代わりに、

「合図は、そちらが動かれた瞬間で」

三夜が提案し、相手もそれを了承した。

その一番の理由は、

「みーちゃんが持つてるの、アレ、第一世代機ですよね」

『みーちゃん』？ ……ああ、あの子か」

うん、そうよ。

二水ちゃん、さっそく『おねえちゃん』してるんだ。

と、百由に小脇をつつかれつつ。

三夜が手にしているのは昼間とは別のCHARAMだった。

第一世代機と呼ばれる変形機構を有さないもので、彼女

が持っているのはブレードタイプのもの。

(形状はアステリオンに似てなくもないですね)

大太刀のようにも使えるし、刃の中間あたりにある持ち手を握れば槍のようにも扱える。同時にその箇所にはアタッチメントも付いていてあらかじめ分割しておけばショートソードとして二刀流可能だが。今回は使わないようだ。昨日のアレが彼女の本気の戦闘スタイルかとも思っていたのだが。

(……いずれにせよ、中近接戦を念頭に置いた選択です)

対する相手は昼間と同じくグングニル。

こちらは第二世代機。つまりブレードとシューティングの変形が可能な機体だ。

そして、

(昼の試合では使っていなかったようですが)

相対する上級生リリイには『縮地』のほかにもうひとつの手があるのだ。

サブスキル『ステルス』。

レアスキル『ユーバーザイン』の下位スキルでその名の通り、自身の気配を消すことのできる隠密系スキルだ。

それが『縮地』と合わさると……。

(気配を消したままの瞬間移動、それもどこから撃つてく

るかも分からない状況、ですか)

それは三夜にも伝えてあるが、

「大丈夫です」

そう応えた彼女は、右手を太太刀の柄に、左手をコアを挟んだ奥側の柄に構えた槍術のスタイルだ。

ただし刃を返し地に向け、初手を切り上げの体勢に置いている。

(……みーちゃん、何をやる気でしょう?)

あえてわざわざ第二世代でなく、第一世代を選んだのだ。

それなりの理由はあるはずだ。

それは、一体?

そう思ったときだ。

三夜が、目をつむり、

同時に、相手の姿が

気配ごと消えた。

武道場の中は静まり返っている。

百由の計器が立てるジジジジというわずかな音すら大きく聞こえるくらいだ。

三夜は、動かない。

目をつぶったまま、軽く半身を引き、いつでも切り上げられる姿勢のまま。

ほぼ、直立不動だ。

対する相手は今も気配を消したまま、高速で移動し続けているはず。

いっどこから撃たれてもおかしくはない。

「……………」

息をするのさえ、はばかれるような沈黙。

そんな中で、

「……………それは『美しく』は、ないです」

唐突に三夜がつぶやいた。

その言葉に二水は、はっとなる。

この武道場までの道のりだ。

『『教え合い』。さっきおねえちゃんは、模擬戦は『教え合い』と言いました』

三夜が二水に訊ねてきたのだ。

「模擬戦が『教え合い』ならば、わたしもあのお方に何かをお伝えしないといけないのですよね?」

「はい」

と応え、困ったように考え込んでしまった三夜に、

「そうですね」

と前置いて、

「みーちゃんは、その、『先生』、千代先生からリリイについて、どういうふうに教えてもらってましたか？」

それに三夜は、

『可憐で、凛々しく、美しくあれ』と」

あー。確かに、みーちゃんの戦い方って無駄がありませんでしたね。

まるで踊っているようだと感じたのを思い出す。

「なら、それをそのまま伝えればいいんじゃないでしょうか」

「??:?」

首を傾げる三夜に二水が教えたのだ。

「ここを直したらもっと『美しく』なりますよって」

(……みーちゃん、まさか、「視えて」るんですかっ！)

目を閉じたのは、多少なりとも気配を感じるため、もしくは精神を集中させるためだと思っていたが。

(『鷹の目』使ってずっと追いかけてます!?)

相手の『ステルス』はサブスキル。対して三夜の『鷹の目』はレアスキルだ。

しかも昨日は通常の『鷹の目』ならば捕捉できない地中からの攻撃にも対応して見せた。

それを千代先生は『異常覚醒』って言っていましたけど……。

「……行きます」

つぶやくように宣言した三夜が前に走り出し、そして次の瞬間、

「っ！ 消え」

ました、と二水が続ける間もなく。

「決着」は、すでについていた。

三夜は姿を消した場所から少し離れた後方で「分離した」太刀のコア側を振り抜いた体勢から、そのまま納刀するような所作で、再びCHARMを連結させる。

つまり、CHARMの分離機構を使った居合抜き。その結果、

ガン！

鈍い音を立て、相手のCHARMの半分、銃口部分が地面へと落ちた。

「貴女の『縮地』は、こう使うんです」

呆然とする相手の目を捉えたまま三夜が言う。

「さあ、『教え合い』を始めましょう」

『答え合わせ』です。

「物理世界において、移動には様々な抵抗が働きます」

加速の際の反作用をはじめ、空気抵抗や足で地を蹴る際の摩擦。

『縮地』はその空間が持つ抵抗ベクトルをすべて逆転換させ、自身の進行方向へ向けた運動ベクトルに上乘せするレアスキルです。

これは『縮地』に対応するマジ時空においては情報体としてのマジが粗であり、かつ方向ベクトルを持って存在し

ているところへ、それらよりも大きなベクトル情報を持った点が出現することによって、そのベクトルの大きさに同方向に存在するマジが押し退けられ空洞地帯を作り、点周囲のマジとともに点を押し出し、かつ点も空洞に吸い込まれる現象が物理世界で発現した結果だと説明されます。

（みーちゃん、唐突に饒舌ですね……）

二水自身も、自分野の話題になると止まらなくなるが、どうやら彼女もそのタイプの子のようだ。

（そういえば、例の『先生』もそうでしたね）

昨日の一方的な流れるような解説を思い出す。

あの方もたしか、ああいう『止まらなくなる』側の方でしたね。

類は友を呼ぶと言いますか。

まさか『妹』を呼ぶことになるとは。

そして、

（また出てきましたね『マジ時空』……）

「百由様」

「ん？」

『マジ時空』って何なんですか？」

「ん？ ああ、聞いてないの？ 千代御代の『マジ時空論』」

「魔法の、マジに関する独自の解釈というのは、さつき先

生から」

その応えに百由は「うーん」と唸って。

「二水ちゃん、ラプラス変換って知ってる？」

「えと、すみません……」

「んー。あれが例えるなら一番分かりやすいんだけどね」と。

簡単に言っちゃうとラプラス変換っていうのは一見複雑な計算を簡単に解決できる制御工学なんかの計算方法なの。

私たちが今いる世界は「時間」の流れがあって、物理計算もその「時間」の世界で行うんだけど。それだと式がどうしても複雑化しちゃう場合があってね。

ラプラス変換って言うのは、その「時間の世界」での計算式を「周波数の世界」の計算式に飛ばす式変換でね、その「周波数の世界」だと「時間の世界」で難しく見える問題が結構簡単な式になるの。

だからそこで問題を解いて、また「時間の世界」に逆ラプラス変換で返ってくる。

そしたら「時間世界」では難しく思ってた式がいつのまにかすごく簡潔になってるって、そういう感じなんだけど。「千代御代の『マジ時空論』はその「時間の世界」をこの

「物理世界」に。「周波数の世界」を彼女が定義した『マジ時空』に置き換えたみたいなもの」

「物理世界」だと説明できないような事柄原因の分からない現象も、世界のルールの違う「マジの世界」、千代御代によると、そこは物理ではなくて「情報」が支配する世界に飛ばして考えると、何も不思議なことがなくなって、そのルールに従った結果を物理世界に持って返ってくると、それが「物理世界では説明できない」不思議な結果になるんだ。

ってそういうお話。

「まあ、実際はもつと複雑な理論なんだけどね」

これでも概略よ？

頭を抱えている二水に、そう言って百由が笑った。

「まあ、今この場に限るのなら、「物理世界」の法則で全部説明可能なんだけどね」

続き、聞いてみましょう。

そう促す先では、三夜の解説が続いていた。

「おそらく、癖なのでしょう」

貴女の『縮地』は一步、余計なのです。

『縮地』を抜けた直後が、と言った方がいいかもしれません。

先ほども言いましたが、『縮地』の発動中は進行方向にかかる抵抗ベクトルが逆転することで異常なスピードを実現します。

この抵抗ベクトルの逆転度合いはスキル保有者のマジ保有量や、『縮地』のマジ時空とどれだけ親和しているかによつて変わりますが、スキルを極めればマジ時空に及ぼす影響が大きくなり、物理世界ではワームホールと呼ばれるものとなります。

ただ、貴女の『縮地』はまだそこまで達していません。ニュートン力学で十分説明可能な範囲の速度です。

だからこそ、単純に「問題」なのです。

「貴女はなぜ、『縮地』を抜けた先で一步踏み込もうとするのですか？」

『縮地』を抜けた先には当然、抵抗ベクトルが存在するの？

先ほどなされていた『縮地』移動の繰り返し、十分『視

させて』いただきました。

そのすべてでそうでした。

だから「癖」だと言ったのです。

貴女は『縮地』を抜けた先で一度踏み込んでから次の行動へ移る「癖」があるのです。

『縮地』を抜けた先は、通常の物理世界です。もう『縮地』世界の常識ではありません。

つまり、

「抵抗ベクトルに自ら飛び込んでどうするんですか？」

それはなまじ直前までの加速の分だけ大きな反作用の塊です。急ブレーキをかけているのにも等しいのです。そのような制動に人体は耐えられません。

通常ならば。

「あ」

「気づいた？」

百由の問いかけに「はい」と二水は応えた。そしてそ

の気づきは、あの上級生も同じだ。

「貴女がその制動に耐えられているのは、マジの障壁があつてこそです」

逆を言うなら、

「貴女のマジ障壁は『縮地』直後の制動の瞬間、すべて抵

抗ベクトルによって後ろに流されているのです」

つまり、

「その瞬間だけは貴女はただの」

女の子にすぎないのです。

言いながら、三夜は差し伸ばした手の先で指を弾いてみせる。

昼間の模擬戦、そこで見せた指打も原理は同じということだ。

そしてそのときはCHARMも同じく。

「シールドを帯びていない単なる金属塊にすぎません」
ですので、

「わたしも同じく制動を使い、貴女とは反対に自らの抵抗ベクトルに乗る形で、残った慣性と、このCHARMの分離アタッチメントも使った抜刀を、あとはそれをさらに貴女が作った抵抗ベクトルに乗せてあげれば」

案外できるものですね。

「斬鉄」

(……いや、普通できませんよ?)

あれ、CHARMって言ってもあくまで模擬戦用ですか
らね!?

ね?

隣の百由を見ると。

首を傾げて、

(できるんじゃない?)

いや実際できてしまってますが!

そういえば、百由様はまさしくその「ベクトル」が見えるお方でしたね……。

思いつつ、さらに隣の吉阪に目を向ければ、

(……なんで目を逸らすんです?)

「ちなみに、制動の瞬間背後に引くのにはもう一つ効果があります」

「カルマン渦」を利用した不規則移動です。

流体の中に杭を立てると、その背後に渦が生じます。これは規則性の読めない、いわゆる乱流です。

ですので、自身が直進することで周囲の空気を流体とみなし、背後で生じていく渦の中にあえて飛び込むことで自分ですらどこに着くか分からないランダムなバックステップが可能になります。

ただランダムとはいえ、何回も繰り返してやっていれば自身に関しては自ずと見当はついてくるのですが。

初見相手には、十分な攪乱になります。

とはいえ、わたし程度の走りですこままでの効果は発揮で

きません。

今回は、貴女が通った後のものを利用させてもらいました。

(……百由様?)

(まあ? 理論的には)

先生はずっと、首を横に振ってますが……。

「おねえちゃんっ」

模擬戦を終え、互いに札を交わし合うと、すぐに三夜が駆け寄ってきて、

「わたし今度はちゃんと『教え合い』できてましたかっ?」

それに二水は、

「はい」

ばっちりです。

ぐっと親指を立ててみせる。

(いや、実は結構、私が分かんないところ多いので、それは後で要勉強なんですけど)

お相手は、ちゃんと納得されたようですし。

ね。

二水のつきだしたままの手に、三夜は一瞬考え、ぱああと目を大きく見開いて。

「うれしいですっ」

同じように親指を立てた手をこつんと合わせ合う。

(なんか、いいですね。こういうの)

我が子の成長を見るといいますか。『実の妹』ですけど。

『千代御代』先生が「私が育てた」って言いたくなかった

気持ち、わからなくもないです。

あれは、挑戦状とか、そういうのじゃなくて、もっと純粹に。

粹に。

(かわいい自分の子を、私に自慢したかったんですね)

そして、その上でその子を託してきた。

名指しを受けたのだ。

「お願い」と。

『二川三夜』という名前で。

私の『実の妹』として。

できれば、もう少しちゃんとした設定にしてほしかったんですけど。あんな雑なのではなく。

まあ、でも。なりゆきとはいえ。

名実ともに私はこの子の『おねえちゃん』になったのです。

だからその分、

(しっかりしないと、ですね)

自分もまだまだ未熟なのは百も承知だからこそ。

『おねえちゃん』もがんばって、『おねえちゃん』できるように、努力します。

この子をちゃんと導いて、この子自身の「願い」を叶えてあげるために。

「ところで、みーちゃん」

「なんですか？」

「みーちゃんはどのようにして百合ヶ丘に入学したかったんですか？」

あ、それはですね。と、につこり笑い、

「制服が、かわいいからです」

その場にいた全員の動きが止まった。

不思議そうに首を傾げる三夜を残して。

「いやあ。いろいろすごかったですね？」

二水たちが去った後の武道場で計測機器を片づけながら百由が語りかけるのは、

「……制服って」

今日一番のダメージを受けている吉阪だった。

「いいじゃないですか、理由はひとそれぞれで」

それで貴重なサンプル……戦力がこのガーデンに加わるのなら。

「あなた、いま」

「空耳です」

半眼でにらまれるがスルーした。

実際、今日取れたデータはどれも非常に貴重なデータだ。

指打や、CHARM斬りも、確かにすごかった。

ただし、あれは彼女、二川三夜の説明の通り、物理学的に十分説明可能なことだ。

ベクトル周りの解説も、レアスキル『この世の理』を持つ百由にはなじみもある。

ステルス状態を知覚したり、『縮地』の速度に対応したりといったあたりで、できるできないは、おいておくとして。そこらへんはまあ、できているんだからできるのだろう。問題は、

（貴女の『縮地』は一步、余計なのです）

『縮地』を抜けた直後が、と言った方がいいかもしれない（ん）

それって、つまりあの子には『縮地』の出口が見えていたってこと。

要するに、

「吉阪先生」

「何？ あなたが終わるまで私も帰れないんだけど？」

つれないな。

と思いつつも、

「あるのかもしれませんが？」

「何が？」

わかってるくせに。

——『空論の魔女』の『マジ時空』。